

幼児のコンピテンスの発達に及ぼす社会的比較の役割

—文化的自己観の発達の観点から—

The effects of social comparison upon the development of
perceived competence of children

: An analysis in terms of the development of the cultural views of self

高田 利武*

Toshitake TAKATA

I. 問題

いわゆる日本人論の中でしばしば述べられているように、西欧人とは異なる日本人の自己 (self) の特徴として、自他の区分が曖昧で独立主体としての“個”の意識が薄く、自己意識の内容が周囲の他者に規定されがちであることが、これまで多く指摘されてきた (高田・丹野・渡辺, 1987)。一方において最近、北山 (1995; Markus & Kitayama, 1994) は文化的自己観の概念を提唱しているが、これはややもすると日本人特殊論に陥りがちなそれらの議論を、全体的・統一的に再構築して理解する枠組みになり得よう。

文化的自己観とは“ある文化において歴史的に共有されている自己についての前提 (北山, 1995)”であり、Markus & Kitayama (1991) のいう相互独立的自己観 (independent construal of self) と相互協調的自己観 (interdependent construal of self) の分類は、そのような文化的自己観に立脚する分析的モデルと言える。前者は“個人は他者から分離しており、他者から独立して独自性を主張することが必要”とする自己観であって、西欧とりわけ北アメリカ中産階級に中心的である一方、後者は“個人は互いに結びついていて個別的ではなく、さまざまな人間関係の一部になりきることが大切だ”とする考えで、日本を含む東洋の文化で前提とされるものである。

この相互独立的—相互協調的自己観の概念は、従来、専ら北アメリカ文化を基底として展開されてきた社会心理学的諸研究を、日本文化における社会的現実¹に立脚して再点検するうえで極めて説得的であり、認知、感情、動機づけなどの心理過程への影響に関する実証的知見が集積されつつある (北山, 1995; 北山・高木・松本, 印刷中)。一方、この概念枠組みに沿って日本文化における自己の特質を十全に把握するには、文化的自己観と諸社会心理過程との関連

の検討もさることながら、そのような特質を持つ自己認識の形成あるいは発達のプロセスを検討する必要があると思われる。その際の分析の視点として、(1) 文化的自己観の特質がどう内在化されてゆくか、という自己認識自体の変化、(2) そのような自己認識が何を手がかりにして形成されるか、という自己形成の方途の問題、の2点を先ず挙げることができよう。

このような観点に立ち、一般に自己再構成の時期とされる青年期を対象に、これまで筆者はいくつかの実証的検討を試みてきた。その結果、(1) 日本人青年の自己評価は成人よりも、相互協調的自己観をはじめとする“日本的自己”の特質を現わしており、青年期に文化的自己観が積極的に内在化されている可能性がある(高田・松本, 1995)、(2) 日本人青年は日本人成人やアメリカ人青年よりも、自己評価の手がかりとして周囲の他者との比較を多用しており、自己認識方途において他者指向的である(高田, 1993)、(3) 相互協調的自己観の特質が優勢である者は自己認識方途の他者指向性が強い一方(高田, 1993)、自己認識の否定的側面ではむしろ他者指向性は弱い(高田, 1995)、等の知見が得られている。

このように、文化的自己観の発達・形成における青年期の意義が示唆されるが、青年期と並んで自己認識の形成・発達の上で重要であるとされる幼児期においてはどうかであろうか。現在のところ、幼児期の自己認識に関する文化的自己観の観点に立った検討は乏しい。その中で、柏木(1988)は日本人幼児における自己抑制(集団場面で自分の欲求や行動を抑制・制止しなければならない時、それを抑制する行動)の発達は、自己主張(自分の欲求や意志を明確にもち、これを他人や集団の前で表現し主張する行動)の発達を凌ぐ傾向を見出しており、これは日本文化における社会化の特質の反映であることを指摘している。しかしながら、これと幼児自身の自己認識との関連は未詳である。

一方、藤崎・高田(1990)および高田・藤崎(1991)は、幼稚園年少児から小学校低学年児にかけての自己認識の変化を、自己有能観の側面から検討している。それによると、Harter & Pike(1984)の認知されたコンピテンス尺度(日本語版; 桜井・杉原, 1985)における自己評価は、幼稚園年少児から年中児にかけて、また、幼稚園年長児から小学校低学年にかけて低下する傾向が顕著に見られた。これは、幼児的全能感を脱却し自己評価の客観性が増すことによる結果と一般には解釈し得よう。他方、Harter & Pike(1984)の尺度を用いた欧米での研究では、このような年齢変化に関する知見が乏しいことから考えて、自己評価の低下は日本文化に特有な自己卑下的自己呈示(吉田・古城・加来, 1982)あるいは自己評価(高田, 1987)の習得の過程を含意している可能性もあり得る。

翻って、日本文化における幼児の自己認識方途に関する実証的研究は、管見の限りこれを見出し得ない。一般的には、例えばSchoeneman, Tabor & Nash(1984)は、アメリカの幼稚園児から小学校低学年の児童を対象とし、自己認識の手がかりとして、(1) 自己観察: 自分の行動やその決定要因の自省、(2) 社会的フィードバック: 他者からの直接・間接の指摘、(3) 社会的比較: 自分と他者との比較、のいずれが多く用いられているかを検討している。その結果、自己観察が最も多く、社会的フィードバックがそれに次ぎ、社会的比較が一番少なく、殊に幼稚園児では全く用いられていないことが報告されている。日本文化における自己認

識方途が他者指向的であるという、前述した青年期における知見を考慮すると、日本人幼児では社会的フィードバックや社会的比較の使用頻度が高くなる可能性も考えられるが、固より本邦での実証的知見は現状では皆無である。また、後述するように Schoeneman et al. (1984) の測定技法自体にも疑念がない訳ではない。

斯かる状況下において、幼児期を対象とした文化的自己観の形成過程の実証的検討が要請される。そこで本研究はその第一歩として、(1) 自己認識自体の変化、(2) 自己認識の方途、(3) 両者の相互関係、の3点について、筆者がこれまでに行なってきた研究に準拠しつつ、幼稚園年少児・年中児・年長児を対象とした横断的資料に基づき、試行的に吟味するものである。具体的な研究の目的は以下の3点である。

1. コンピテンスの自己評価を通じて、幼児の自己認識の年齢変化を検討する。
2. 自己認識の手がかりとして、Schoeneman et al. (1984) における3方途のいずれが多く用いられているか、殊に社会的比較がどの程度用いられているかを検討する。その指標として、面接資料の他に行動観察資料も用い、その両者の関係について検討を加える。
3. コンピテンスの自己評価と、自己認識方途との関係を検討する。

II. 方法

対象児 奈良大学付属幼稚園の年長児(平均年齢5.6歳)11名(男5、女6名)、年中児(平均年齢4.7歳)11名(男5、女6名)、年少児(平均年齢3.7歳)12名(男5、女7名)の3群を対象とした。

手続き 1993年11月から1994年2月にかけて、以下の1～3の資料を収集した。なお、面接者と観察者は筆者および社会心理学専攻の女子学生である。

1. コンピテンス測定尺度：Harter & Pike (1984) に基づいて桜井・杉原 (1985) が作成した日本語版幼児用コンピテンス尺度(4段階評定)を用いた。認知面、運動面、仲間からの受容、母親からの受容の4つの側面で、幼児が自分自身をどれくらい有能であると感じているかを、個別面接を通じて測定する。桜井・杉原 (1985) の全30項目から、従来の研究結果に基づいて選択した各側面3項目、合計12項目の短縮版によった。

2. 自己認識方途の測定：Schoeneman et al. (1984) に従い、自己認識方途として、自己観察、社会的フィードバック、社会的比較、の3方途を取り上げた。Schoeneman らの技法は、ある特性をもった(例えば、汚い様子)子どもが、上記3種の手がかりの各々を用いて自分の特性に気づいたことを含意する3つの絵を示し、自分の特性を知るにはどれが最もよい情報源であると思うかを問う、というものである。しかしながら、幼稚園年長児を対象とした予備的調査によれば、この測定技法には疑念がない訳ではなく、幼児が果たして測定技法を理解しているか、あるいは幼児の回答が日常場面における行動を反映するものであるか否か、等の問題点が示唆されている(高田、未発表資料)。

そこで、探索的な意味も兼ねて対象児に直接質問をすることとし、コンピテンスの測定後、

認知面（絵が上手か否か）、運動面（ブランコが上手か否か）、仲間からの受容（友達が多いか否か）の各々について、何故そういう評価をしたのかを尋ねて記録した。適切な答えが自発的に出てこない場合は、「自分のことを自分で考えてそう思ったの？（自己観察）」「お母さん（先生、友達）から言われてそう思ったの？（社会的フィードバック）」、「（友達の名前）ちゃん比べてそう思ったの？（社会的比較）」という質問をし、それを肯定するか否定するかを記録した。なお、コンピテンスの4側面のうち母親からの受容については、質問を構成するのが難しいので、これを省略した。

3. 行動観察記録：自己認識の中でも特に社会的比較に注目する観点から、対象児の社会的比較行動を観察・記録し、これと面接における測定結果との対応を検討した。資料収集と分析法は高田（1994）に従った。即ち、幼稚園での幼児の日常の行動（自由遊び、および、課題行動）を各対象児について10分間VTR録画により記録し、そこに現われた社会的比較を含む行動に対し、以下の手順によって分析を行なった。

1) エピソードの区分：10分間のVTR記録を、その間に展開された対象児の行動の内容に基づいてエピソードに区切り、エピソード毎に行動分析・評定を行なった。1つのエピソードが異なった行動様態から構成されている場合は、さらに下位エピソードに区分し、各下位エピソードについて持続時間と内容を基本特性として分類した。

2) 社会的比較に関する評定：対象児が何等かの形で他児を参照する行動を社会的比較行動として捉え、それらを以下の6カテゴリーに分類した。下位エピソード毎に、これらのカテゴリーに含まれる行動の有無を評定した。

3) 社会的比較行動のカテゴリー：自他の比較がどのような役割を果たしているか、という社会的比較の機能面に主に焦点をあてて以下の6つのカテゴリーを設定した。これらは、子どもの社会的比較を行動観察によって分析した先行研究に主に基づく。

- ①他児への関心：他児の様子を窺う、作業・制作内容を見る、等の行動であり、Frey & Ruble (1985) の“仲間への注意”、“仲間の作業への注意”に対応する。
- ②他児の模倣：仲間の行動に引き続いて、それと同一の行動が生じた場合、他児への関心が行動として現われたものとして捉え、社会的比較の一表出形態とした（高田, 1992）。
- ③直接的評価：対象（行為、役割、所有物、作品、成績等）について、直接に対比する行動であり、Frey & Ruble (1985) の“成績の比較”、Mosatche & Bragonier (1981) の“評価”に対応する。
- ④間接的評価：対象について、間接・暗黙に対比する行動で、Frey & Ruble (1985) の“仲間の進捗のチェック”、Mosatche & Bragonier (1981) の“認知的明瞭さ”にほぼ対応する。
- ⑤達成・競争：対象について、達成の程度を競争的に対比する行動で、Frey & Ruble (1985) の“成績の比較”の一部、Mosatche & Bragonier (1981) の“競争”が対応する。
- ⑥他児との類似性の確認：対象について、他児との類似性を強調する行動であり、Frey & Ruble (1985) の“類似性の比較”、Mosatche & Bragonier (1981) の“弁別・類

似”に対応する。

Ⅲ. 結 果

コンピテンスの自己評価の年齢変化 認知面、運動面、仲間からの受容、母親からの受容の4側面の各々に含まれる3項目での自己評価を平均して、各側面のコンピテンス得点とし、これを各対象児毎に算出した。その各年齢群毎の平均値を示したのが表1である。各側面毎に分散分析を実施したところ、認知面を除いて年少児のコンピテンスの自己認識が最も高く、以後年齢を加えるにつれて得点が下降する傾向が認められる。しかしながら、母親からの受容では統計的有意差に達していない。Newman-Keuls 検定による群間比較によれば、運動面では年少児と年長児および年中児との間、仲間からの受容では年少児と年長児との間に有意差 ($p < .05$) が見られる。これらの結果は従前の知見(藤崎・高田, 1990; 高田・藤崎, 1991)と基本的に一致している。

表1 コンピテンス得点の年齢別平均値

	認知面	運動面	仲間からの受容	母親からの受容
年少児 (n=12)	3.31 (.80)	3.56 (.52)	3.57 (.52)	3.28 (.79)
年中児 (n=11)	3.53 (.56)	2.97 (.55)	3.42 (.68)	3.06 (.73)
年長児 (n=11)	3.38 (.63)	3.00 (.33)	2.82 (1.00)	2.71 (.90)
分散分析結果 df=2, 31	F=0.32 n.s.	F=5.56 p<.01	F=3.12 p<.06	F=1.42 n.s.

- ・得点は最高値4から最低値1点の間に分布。
- ・()内の数値は標準偏差。

自己認識方途の年齢変化 質問に対する自発的な回答は、その内容を検討して自己観察、社会的フィードバック、社会的比較のいずれかに分類した。分類不能な回答はその他とした。自発的のなかった場合は、自己観察、社会的フィードバック、社会的比較の各質問を肯定した場合、その方途を用いているものとした。ただし、3つの質問のすべてを肯定した場合は、その回答の信憑性に疑いがあるので無答とした。したがって無答には、自発的の回答と手がかり質問のすべてに答えなかった場合以外に、このようなケースが含まれている。

自発的の回答と質問への答えとを総合して、各方途が回答された頻度をコンピテンスの各側面、および、年齢別に示したのが表2である。各方途毎に年齢による回答頻度の相違を検討したところ、認知面と運動面で、自己観察、その他、無答において有意差ないし傾向差が見られた(直接確率計算法で $p < .01 \sim .10$)。

さらに、本研究の焦点とした3方途への回答に及ぼす年齢の効果を全体的に検討するべく、

表2 自己認識方途についての年齢別回答頻度

認知面	自己観察	社会的 フィードバック	社会的 比較	その他	無 答
	年少児 (n=11)	6 (54.5)	7 (63.6)	2 (18.2)	5 (45.5)
年中児 (n=11)	9 (81.8)	6 (54.5)	2 (18.2)	1 (9.1)	0 (0.0)
年長児 (n=11)	10 (90.9)	6 (54.5)	4 (36.4)	0 (0.0)	0 (0.0)
合 計	25 (75.8)	19 (57.6)	8 (24.2)	6 (18.2)	2 (6.1)
運動面	自己観察	社会的 フィードバック	社会的 比較	その他	無 答
	年少児 (n=11)	7 (63.6)	5 (45.5)	3 (27.3)	3 (27.3)
年中児 (n=11)	9 (81.8)	4 (36.4)	2 (18.2)	0 (0.0)	0 (0.0)
年長児 (n=11)	11 (100.0)	2 (18.2)	1 (9.1)	0 (0.0)	0 (0.0)
合 計	27 (81.8)	11 (33.3)	6 (18.2)	3 (9.1)	2 (6.1)
仲間からの受容	自己観察	社会的 フィードバック	社会的 比較	その他	無 答
	年少児 (n=11)	7 (70.0)	5 (50.0)	3 (30.0)	2 (20.0)
年中児 (n=11)	7 (63.6)	2 (18.2)	5 (45.5)	1 (9.1)	1 (9.1)
年長児 (n=11)	10 (90.9)	2 (18.2)	3 (27.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
合 計	24 (75.0)	9 (28.1)	11 (34.4)	3 (9.4)	3 (9.4)

- 数値は各年齢群で各回答をした者の数。()内は、各年齢中で各回答をした者の割合。
1人の子どもが複数の回答をした場合があるので、年齢別の回答頻度の合計は調査対象児の数を上回る。
- 合計の()内は全体を通じて各回答をした者の割合。
- 年少児1名は質問不能のため除外した。

総合指標として自己認識方途得点を算出した。これは、各方途が回答された度数を合計したもので、最大値3点(3つのコンピテンス側面の全部でその方途の回答があった場合)から最小値0点(3つのコンピテンス側面のいずれでもその方途の回答がなかった場合)である。この得点の年齢別平均値を表3に示す。3(年齢)×3(方途:繰り返し要因)の分散分析を実施したところ、方途の主効果が有意であり(F(2.62)=32.83 p<.001)、自己観察が最も多く社会的比較が最も少ない。Newman-Keuls検定による群間比較では、3方途のいずれの間にも有意差(p<.05)がある。また、年齢×方途の交互作用も有意であり(F(4.62)=3.27 p<.02)、自己観察においてのみ有意な年齢差がある(F(2.31)=4.47 p<.02)。Newman-

表3 自己認識方途得点の年齢別平均値

	自己観察	社会的 フィードバック	社会的 比較
年少児 (n=11)	1.67 (1.30)	1.42 (.90)	.67 (.78)
年中児 (n=11)	2.27 (.79)	1.09 (.83)	.82 (.98)
年長児 (n=11)	2.82 (.40)	.91 (.70)	.73 (.90)

- ・得点は最高値3から最低値0点の間に分布。
- ・（ ）内の数値は標準偏差。
- ・統計処理の結果は本文参照。

表4 エピソード・下位エピソードの数と持続時間

	エピソード		下位エピソード		総数
	平均数	平均持続時間	平均数	平均持続時間	
年少児 (n=12)	3.83 (2.69)	288.6 (232.5)	8.92 (2.57)	66.5 (60.8)	107
年中児 (n=11)	3.27 (2.57)	312.6 (216.4)	7.36 (3.59)	80.4 (94.6)	81
年長児 (n=11)	2.00 (1.84)	463.5 (220.3)	6.27 (2.87)	97.4 (105.8)	69
分散分析結果 df=2, 31	F=1.73 n.s.	F=2.02 n.s.	F=2.27 n.s.	F=2.74 p<.06	

- ・持続時間の単位は秒。
- ・（ ）内の数値は標準偏差。

Keuls 検定によれば、年長児は他の2群より有意 ($p<.05$) に自己観察の回答が多い。

これらの結果を総合すると、以下の傾向が認められる。(1) 年少児では、その他と無答が年中・年長児より相対的に多い。即ち、年少児は未だ自己認識の方途をはっきりと認知していない可能性がある。(2) 自己観察が各年齢を通じて最も用いられている方途であるが、その比重は年齢とともに高くなる。(3) 社会的比較は3つの方途のうちで最も用いられていないが、幼稚園児では皆無であるという Schoeneman et al. (1984) の知見とは異なり、他者との比較を通じて自己認識を行なっている幼児も小数ではあるが存在する。殊に、仲間からの受容では、総じて社会的フィードバックよりも回答頻度が多い。

社会的比較行動の年齢変化 各対象児のエピソードと下位エピソードについて、その平均数と持続時間を年齢毎に算出したところ、表4のようになった。エピソード、下位エピソード数は年齢とともに減少し、それに伴って持続時間は長くなっている。この傾向は従来の知見(高田, 1994)と基本的に一致しているが、統計的有意差に達したのは下位エピソード持続時間のみである。

次に、比較の生じた下位エピソードの1人あたり平均頻度、および、各々のカテゴリーに該当する社会的比較が起こった下位エピソードの1人あたり平均頻度を算出した。これを年齢別

に示したのが表5である。これによれば、比較の生じた下位エピソードの数は年齢間で差がない。また、達成・競争と類似性の確認に係わる比較行動は年少児に多い傾向がある。それ以外の比較行動においては年齢による相違が見られないが、総じて年長児に比較行動が少ない傾向が認められる。従来の知見（高田，1994）では、類似性の確認が年少児に多いことが示されており、これは本研究でも追認されている。しかしながら、同時に従来の結果では、比較行動の総数や他児への関心、直接的評価は年齢が高くなるほど増加することが示されている。今回の結果、とりわけ年長児の比較総数が少ないことは、それと矛盾するものである。

社会的比較：自己認識方途と行動との関連 自己認識の手がかりとして社会的比較と回答した子どもは、日常の場面でどのような社会的比較行動を行なっているかを検討するために、方途得点と社会的比較頻度との相関係数を計算した結果が表6である。これによると、自己認識方途としての社会的比較の回答頻度と、行動観察における諸種の社会的比較行動との間には、

表5 各内容の比較を含む下位エピソードの1人あたり平均頻度

	他児への関心	他児の模倣	直接的評価	間接的評価	達成・競争	類似性の確認	エピソード数
年少児 (n=12)	1.92 (1.38)	.93 (1.44)	.25 (.62)	.67 (.98)	.42 (.67)	.67 (.65)	3.00 (1.76)
年中児 (n=11)	2.09 (2.02)	1.00 (1.34)	.18 (.40)	.45 (.52)	.09 (.30)	.18 (.40)	2.73 (2.24)
年長児 (n=11)	1.45 (1.51)	.18 (.40)	.27 (.65)	.73 (.90)	.00 (.00)	.18 (.60)	1.91 (1.45)
分散分析結果 df=2, 31	F=0.43 n.s.	F=1.64 n.s.	F=0.08 n.s.	F=0.33 n.s.	F=2.97 p<.07	F=2.82 p<.08	F=1.08 n.s.

・（ ）内の数値は標準偏差。

表6 自己認識方途得点と社会的比較頻度との相関

	他児への関心	他児の模倣	直接的評価	間接的評価	達成・競争	類似性の確認	比較総数
社会的比較							
年少児	.141	.216	.376	.079	-.233	.120	.332
年中児	-.495 [?]	-.152	-.160	-.408	-.276	-.160	-.434 [?]
年長児	-.413	-.124	-.202	-.100		-.267	-.327
自己観察							
年少児	.186	.516*	.000	-.095	.070	-0.36	.476 [?]
年中児	.423	.379	-.486 [?]	.155	.307	-.172	.387
年長児	-.015	.222	.209	.124		.149	.140
社会的フィードバック							
年少児	.397	.729*	.447 [?]	.171	-.164	-.052	.632*
年中児	-.184	-.090	-.054	.126	-.036	-.352	-.039
年長児	.043	.062	-.161	-.201		.516 [?]	-.009

・*は5%水準、[?]は10%水準で有意であることを示す。

・年長児では達成・競争行動は見られないため、相関計数は算出されない。

年齢に関係なく正の相関は殆ど見られない。つまり、「他の人と比べてそう思った」と回答した子どもは、日常場面で様々な内容の社会的比較行動を必ずしも多く行っている訳ではないと言える。したがって、自己認識方途として社会的比較を挙げることは、現実の社会的比較行動とは別次元のものである可能性が示唆されよう。

表6には他の自己認識方途と社会的比較行動との間の相関も示してあるが、これによると年少児において有意な相関が散見される。即ち、社会的フィードバックの頻度と、他児の模倣・比較総数との間に正の相関が見られる。したがって、日常の比較行動が多かったり他児の模倣が多いことは、他者からの指摘により自己を認識しがちなことと結びついている可能性も考えられる。

コンピテンスの自己評価と自己認識方途の関係 コンピテンス得点と自己認識方途得点との相関係数を各年齢別に算出したところ、表7のようになった。有意な相関に主に着目すると、以下のような傾向が示唆される。(1) 他者指向的な自己認識方途である社会的比較と社会的フィードバックにおいて、自己評価との正の相関が目立つ。これは年少児に特に顕著である。即ち、自己認識方途として社会的比較を挙げる頻度の高い幼児は、運動面(年少児、年中児)と母親からの受容(年中児、年長児)の側面でコンピテンスの自己評価が高い。また、社会的フィードバックの回答頻度が高い幼児は、運動面(年少児、年長児)、仲間からの受容(年少児)、母親からの受容(年少児)の側面でコンピテンス得点が高い。(2) 自己観察と運動面のコンピテンス得点の間には負の相関が目立つ。つまり、自己認識方途として自己観察を多く用いる子ども、とりわけ年中児は運動面のコンピテンス得点が低い。他方、年長児だけは認知面のコンピテンス得点との間に正相関がある。即ち、年長児では自己観察とコンピテンス得点との関係が、他の年齢よりも相対的に大きいと言える。

表7 コンピテンス得点と自己認識方途得点との相関

		認知面	運動面	仲間からの受容	母親からの受容
自己観察	年少児	-.097	-.060	.148	.098
	年中児	-.172	-.444 [†]	.073	-.381
	年長児	.556 [*]	-.247	-.090	.116
社会的フィードバック	年少児	.271	.562 [*]	.415 [†]	.419 [†]
	年中児	.208	.227	-.250	.376
	年長児	.349	.428 [†]	-.405	-.283
社会的比較	年少児	.374	.575 [*]	.322	.362
	年中児	.343	.672 [*]	-.072	.624 [*]
	年長児	.344	-.332	.087	.487 [†]

・・は5%水準、[†]は10%水準で有意であることを示す。

IV. 考 察

本研究の主たる結果は以下の5点に要約される。

1. 幼児の自己評価の年齢変化：年少児から年長児にかけて、コンピテンスの自己評価が低下するという、従来の知見が概ね追認された。
2. 幼児の自己認識方途：年少児は必ずしも明確には認知していない傾向があるが、各年齢を通じて最も挙げられた方途は自己観察であり、それは年長児ほど顕著になる。社会的比較は各年齢ともあまり挙げられないものの、アメリカでの知見とは異なり皆無ではない。
3. 幼児の社会的比較行動：類似性の確認が年少児に多い点を除いては、従来の知見を追認する結果は得られなかった。就中、比較行動が少ないことをはじめ、年長児にそれが目だった。
4. 自己認識方途としての社会的比較と社会的行動との関係：両者の関連は認められず、各々は異なった次元にあると考えられる。また、比較行動、殊に他児の模倣の頻度と、社会的フィードバックによる自己認識との関連が年少児に認められた。
5. 自己評価と自己認識方途との関係：社会的比較あるいは社会的フィードバックという、他者指向的な自己認識方途の使用と自己評価の高さとの関連が、年少児を中心に認められた。

これらの結果のうち、社会的比較行動に関する従来の知見と異なった年長児の傾向は、主として観察場面の不適切さに由来すると考えられる。即ち、時間的制約により観察場面の選択に必ずしも十全を期し得なかったため、年長児の観察場面は年少児・年中児に比べて戸外の遊びが極端に少なく、逆にテレビ視聴場面が多く含まれていることが、斯かる結果をもたらした一因と考えられる。このように本研究は試行的なものであり、加えて調査対象児数も少ないため、統計的に信頼し得る知見は比較的少数に止まっている。それにも拘らず、上記の諸結果の中には、幼児期における文化的自己観の形成を探るという、本研究の目的に即したいくつかの示唆も含まれる。以下にその若干を考察する。

幼児の自己認識方途 自己認識の方途に関して、最も普遍的に見られた傾向は自己観察であったが、Schoeneman et al. (1984) によるアメリカでの知見とは異なり、幼稚園児、殊に年少児においても僅かとはいえ社会的比較を通じて自己評価を行なう子どもが見出されたことが注目されよう。自己再構成期にある日本人青年は、自らの自己を認識してゆく過程において他者指向性が強いことが、従来の知見に現われている(高田, 1993)。そのような自己認識の他者指向性の萌芽が既に幼児期において見られると解釈できる点で、本研究の結果は極めて示唆的であると言えよう。

固より、コンピテンスの自己評価の理由を幼児に直接質問するという、本研究で用いた方法には疑問の余地も残される。特に、自発的回答がない場合に用いた「自分でそう思ったの?」という質問は、かなり意味的に曖昧な部分を含んでいるとも言え、必ずしも自己観察という自己認識方途を明瞭に認知していない幼児でも、肯定の回答をした可能性がある。各年齢群を通

じて自己観察が圧倒的に多く見られたのは、そのような方法的問題に由来する疑いは否定し得ない。しかしながら、そのような面接時の一般的状況の中であって、自己観察の質問に比べれば意味の限定性の強い社会的比較や社会的フィードバックの質問に対して、これを肯定する幼児が一定数いたという事実には、日本人幼児の他者指向的な自己認識がその背景にあるとも言える。いずれにせよ、測定方法を吟味したうえ、幼児の自己認識方途について今後さらに検討を加える必要があろう。

社会的比較行動と自己認識方途 社会的比較に関する自己認識方途得点と社会的比較の頻度との間の正相関は見られず、自己認識の手がかりとして他者との比較を認知することは、現実の社会的比較行動とは別次元のものと考えられた。つまり、幼児の日常生活場面での社会的比較行動は自己認識の機能を直接には担っていないと思われる。これは幼児の社会的比較の機能に関する従来の議論（例えば、Ruble & Frey, 1991）と整合する。

他方、殊に年少児の場合、他児の模倣等の比較行動が多い子には、自己認識方途として社会的フィードバックの回答が多かった。これについては、日常的に社会的比較行動を行なうことを通じて、自分の周囲の他者の言動に対する敏感さがもたらされると解釈することが可能である。したがって、日常生活の中で自分と他児とを比較するさまざまな行動は、社会的比較を手がかりとする自己認識にすぐに結びつくのではなく、自分の周囲の他者の言動に対する一般的な敏感さをもたらす。そして、その日頃の他者への敏感さが媒介となって、コンピテンスを自己評価する際に、社会的比較や社会的フィードバックという他者指向的な方途を用いるのではないかと考えることも可能であろう。このように、幼児の社会的比較行動が自己認識に及ぼす影響に関しては、なお検討の余地がある。

自己認識方途と自己評価 一方、年少児を中心に自己認識方途と自己評価の関連が見られ、他者指向的な自己認識方途を用いる子どものコンピテンス自己評価は高い傾向が見られた。これと上記した社会的比較行動と自己認識方途との関連を重ね合わせると、社会的比較行動を多く行ない、他者の言動に敏感であり、それを自己認識の手がかりとしている幼児のコンピテンス得点は高い、言い換えれば自己価値観や自尊感情が高いと言える。このことは、屢述した日本文化における自己認識方途としての他者の重要性が、幼児においてもある程度あてはまることを示唆している。他者の言動を通じて自分の姿を知るというやり方が、子どもの周囲の世界で一般的であり是認されている文化では、そのやり方を見習い採り入れた子どもの自尊感情は高くなるのかも知れない。

翻って、年齢とともにコンピテンスの自己評価が低下するという、本研究で再度確認された傾向は何を意味するのであろうか。本稿冒頭で述べたように、これを日本文化における自己卑下的な自己認識が形成される過程を示すものとも考えることもできよう。しかしながら、そのような解釈は、日本文化で優勢な自己認識方途を習得した子どもの自己評価は高い可能性がある、という上述した考えと矛盾する。ところで、日本人青年の場合、単に自己評価がアメリカ人青年より低い傾向があるだけでなく（高田, 1993）、限定された対人関係の中で相互協調的自己観を重視する、相互独立的自己観が微弱であるが排他的な利己主義が強い、等の自己認識の

特徴が挙げられている（高田・松本, 1995）。したがって、幼児が日本的自己の特質を獲得するとしても、それは必ずしも自己卑下の傾向には限られないのは勿論であろう。幼児の自己認識の中に、文化的自己観がどのように反映されているかを実証的に明らかにすることは、今後の検討課題の一つである。

幼児の自己認識の正確性 このように考えると、幼児のコンピテンスの自己評価の低下に関しては、幼児の自己認識の正確性を検討することがむしろ先決問題であろう。社会的比較行動、自己認識方途、自己評価の3者の相互関係に関する上述の傾向は、一般に自己認識方途の認知が未だ明確にはなりきっていない可能性のある年少児に顕著なものであった。子どもの年齢が高くなるに従って、このような傾向は弱まっている。年長児では自己認識の手段として自己観察のウェイトが高まる一方、コンピテンス得点は低下している。即ち、年齢ともに自己認識方途の認知が明確となり、自己観察の比重が高くなるとコンピテンスの自己評価が低くなることから、社会的比較と結びついた年少児の高いコンピテンス自己評価は、子どもの実際の能力を必ずしも正確に反映していない可能性が考えられるのである。

幼児の自己認識の正確さは、単に認知能力の発達に依存するだけでなく、文化的自己観の観点からも重要な意味を持つと思われる。例えば、Priel, Assor & Orr (1990) は、幼児のコンピテンスの自己評価の正確さを、幼児に対する保育者の評価とのズレを指標として検討する中で、自己認識の正確さ自体やコンピテンスのどの側面で正確さが増大するかは、幼児の周囲の文化的環境に影響されることを示している。したがって、日本人幼児における年齢による自己評価低下の意味を、縦断的方法をも取り入れた上で、自己評価の正確さの面からさらに検討することが必要である。そのような研究を経て、幼児の自己認識の発達と文化的自己観の関連を更に追求することが、今後の課題として残されていると思われる。

引用文献

- Frey, K.S. & Ruble, D. N., 1985 What children say when the teacher is not around : Conflicting goals in social comparison and performance assessment in the classroom. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 550-562.
- 藤崎真知代・高田利武 1990 子どもの自己形成に及ぼす社会的比較の影響 - (1) 幼児の面接資料の分析 - 日本心理学会第54回大会発表論文集, 50.
- Harter, S. & Pike, R. 1984 The pictorial scale of perceived competence and social acceptance for young children. *Child Development*, 55, 1969-1982.
- 柏木恵子 1988 幼児期における「自己」の発達 - 行動の自己制御機能を中心に - 東京大学出版会
- 北山 忍 1995 文化的自己観と心理的プロセス 社会心理学研究, 10, 153-167.
- 北山 忍・高木活人・松本寿弥 印刷中 日本の自己の文化心理学 I. 成功と失敗の帰因 心理学評論.
- Markus, H.R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self : Implications for cognition, motivation, and emotion. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Markus, H.R., & Kitayama, S. 1994 The cultural construction of self and emotion : Implications for social behavior. In S. Kitayama & H.R. Markus (Eds.) *Emotion and Culture*. Washington D.C. : American Psychological Association. Pp.89-130.
- Mosatche, H., & Bragonier, H. 1981 An observational study of social comparison in

- preschoolers. *Child Development*, 52, 376-378.
- Priel, B., Assor, A., & Orr, E. 1990 Self-evaluation of kindergarten children : Inaccurate and undifferentiated? *Journal of Genetic Psychology*, 151, 377-394.
- Ruble, D.N., & Frey, K.S. 1991 Changing patterns of comparative behavior as skills are acquired : An functional model of self-evaluation. In J. Suls & T.M. Wills (Eds.) *Social Comparison: Contemporary Theory and Research*. Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates. Pp.79-113.
- 桜井茂男・杉原一昭 1985 幼児の有能感と社会的受容感の測定 教育心理学研究, 33, 237-242.
- Schoeneman T., Tabor, L., & Nash, D. 1984 Children's reports of the sources of self-knowledge. *Journal of Personality*, 52, 124-137.
- 高田利武 1987 社会的比較による自己評価における自己卑下の傾向 実験社会心理学研究, 27, 27-36.
- 高田利武 1992 他者と比べる自分 サイエンス社
- 高田利武 1993 青年の自己概念形成と社会的比較 -日本人大学生にみられる特徴- 教育心理学研究, 41, 339-348.
- 高田利武 1994 幼児の社会的比較 日本社会心理学会第35回大会発表論文集, 300-301.
- 高田利武 1995 自己認識方途としての社会的比較の位置 -日本人大学生にみられる特徴- 奈良大学紀要, 23, 259-270.
- 高田利武 未発表資料 幼児の自己認識方途測定を試み
- 高田利武・藤崎真知代 1991 子どもの自己形成に及ぼす社会的比較の影響 - (4) 2年間の縦断的検討 - 日本教育心理学会第33回総会発表論文集, 257-258.
- 高田利武・松本芳之 1995 日本の自己の構造 -下位様態と世代差- 心理学研究, 66, 173-178.
- 高田利武・丹野義彦・渡辺孝憲 1987 自己形成の心理学 -青年期のアイデンティティとその障害- 川島書店
- 吉田寿夫・古城和敬・加来秀俊 1982 児童の自己呈示の発達に関する研究 教育心理学研究, 30, 120-127.

付記 本稿は平成6年度奈良大学特別研究費による研究の一部である。研究実施にあたり、多大の御協力を賜った奈良大学附属幼稚園園長の高橋光雄教授、副園長の新堂満千子先生はじめ諸先生に深く感謝致します。